連続公開講座「仏教と哲学」(2023/12/02)

心は宇宙と同じ大きさなのか

唯識・唯心思想のアポリアをめぐる議論

師(もろ) 茂樹（花園大学）

はじめに

「仏教と哲学」についての誤解

- 日本では、仏教学≒文献学（思想史研究）？
  - 「世界哲学」としての仏教哲学
- 日本では、哲学者≒「現代思想」の研究者？

唯心論としての仏教

- 仏教は様々なものが〈心〉によって作り出されると考える。
  - 「一　ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも汚れた心で話したり行なったりするならば、苦しみはその人につき従う。――車をひく（牛）の足跡に車輪がついて行くように。
    二　ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも清らかな心で話したり行なったりするならば、福楽はその人につき従う。――影がそのからだから離れないように。」(中村元訳「真理のことば（ダンマパダ)」『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波文庫)
- 仏教における〈心〉は認識のこと（日本語で言う「こころ」ではない)。
  - 「五根が、その対象である五境と接触することで生じる認識、それ自体を「心(しん)」というのである。眼根が外界にある青の極微と接触すると、私たちの内部に「青という認識」が生じるが、その認識そのものを「心」と呼ぶ。心イコール認識である。仏教では「認識」とは言わずに単に「識」と呼ぶので、正式に言うなら、心イコール識である。」(佐々木閑『仏教は宇宙をどう見たか：アビダルマ仏教の科学的世界観』化学同人)
- 大乗仏教において、唯心思想が発展した。その代表が唯識思想。
  - 「明確な「唯心」思想を説いたのはインド大乗仏教である。すなわち、『華厳経』は「三界（世俗世界・迷いの世界）は虚妄にして但だ是れ心の作なり」あるいは「心は巧みなる画師の如く、種々の五陰（存在要素）を画き、一切世界の中に法（存在物）として造らざるものなし」と説き，その後の本格的唯心思想の展開の聖教量（経典に述べられた根拠）となった。大乗仏教において心・意識と現象世界との関係を理論づけたのは唯識学派である。唯識学派は、識（vijñāna. 深層意識をも含めた意識）によって世界と自己との一切を解釈した。彼らは、識には前六識（眼・耳・鼻・舌・身・意)、末那識（執着を伴った思量の働き)、アーラヤ識（根元的な意識の働き）があり、こ

れらが転変して世界（認識対象）と自己意識（認識主体）が成立すると考えた。」（『岩波哲学・思想辞典』）

- 「　人間は自分という牢獄に閉じ込められた囚人である
……ふつう私たちは、一つの共通の空間、広くは宇宙の中に住んでいると思っています。……でも、そのような一つの共通な宇宙といったものは、人間同士が言葉で語り合うことによって「ある」と認め合った宇宙であり、いわば抽象的な存在です。それとは全く次元を異にしたもう一つの宇宙、すなわち具体的な宇宙があるのです。それはその中に「自分」が閉じ込められ、自分のみが背負って生きていかなければならない宇宙です。……ほんとうに一人一宇宙なのです。このことを、〈人人唯識〉といいます。だから三人いれば三つの世界があります。」（横山紘一『唯識の思想』講談社学術文庫）
  - ➡ 「多自然主義」としての唯識

- 三界（≒宇宙）は〈心〉が作り出したものだとすれば、〈心〉は宇宙全体を認識しているということ？
  - Cf. 「大いなるかな、心や。天の高きは極むべからず、しかも心は天の上に出づ。地の厚きは測るべからず、しかも心は地の下に出づ。日月の光は踰ゆべからず、しかも心は、日月光明の表に出づ。大千沙界は窮むべからず、しかも心は大千沙界の外に出づ。」（栄西『興禅護国論』）

『成唯識論』における環境世界（器世間）をめぐる議論

所言処者、謂異熟識、由共相種成熟力故、変似色等器世間相。即外大種及所造色。雖諸有情所変各別、而相相似、処所無異、如衆灯明各遍似一。

〔『唯識三十頌』が〕言う「場（処; *sthāna*）」とは、異なった結果となる識（異熟識）〔である第八識〕が、〔有情のあいだで〕共有しているすがた（共相）に関する種子の成熟の力によって、色（もの）などの環境世界（器世間）のすがたに似て変化したものである。すなわち、〔身体の〕外にある〔四〕大元素（大種）や〔四大元素によって〕構成された色（もの）のことである。生きとし生けるもの（諸有情）〔の異熟識が〕変化したものはそれぞれ〔有情ごとに〕異なるが、そのすがたは相互に似ており、場所も同じである。あたかも、複数の灯明が、それぞれ全体に行き渡り、一つ〔の灯明〕に似ているように。

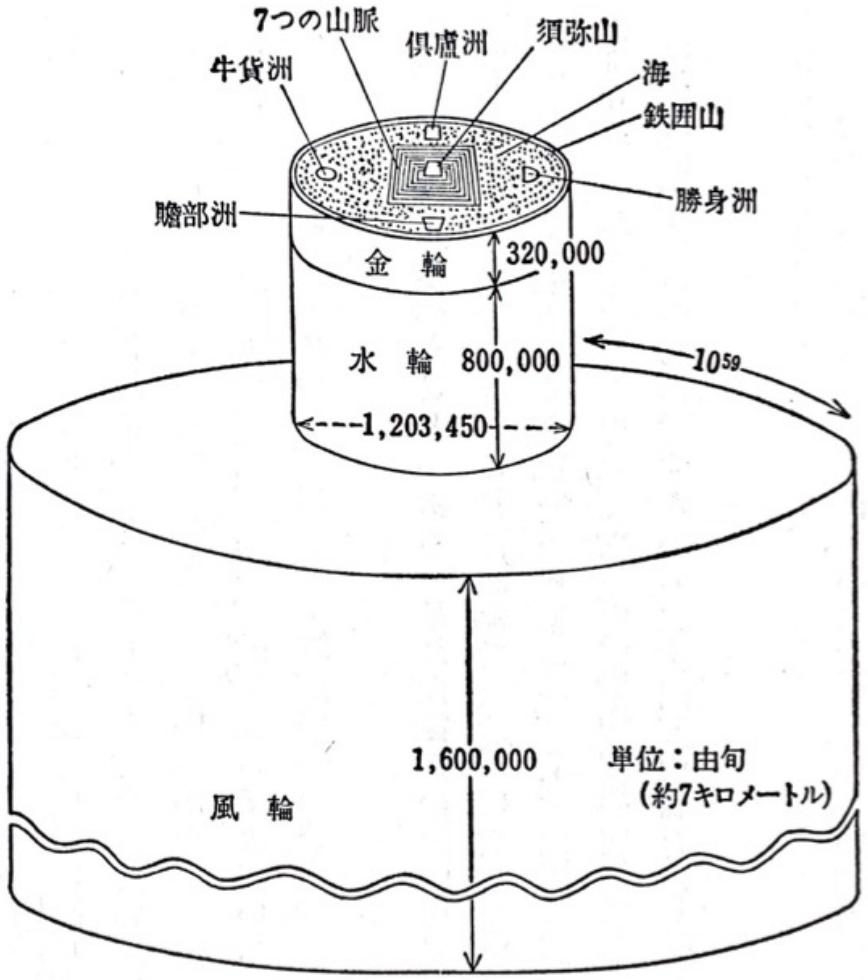
誰異熟識変為此相。

〔質問。〕誰の異熟識が、この〔環境世界などの〕すがたに変化するのか。

有義、一切。所以者何。如契経説「一切有情業増上力共所起故」。

〔回答。〕ある者の説[1]では、すべて〔の有情の異熟識がすべての世界を作っている〕、という。その理由は何か。経に「すべての（一切）有情の業のすぐれた力（増上力）が、協同で〔器世間を〕生起するから」と説くように。

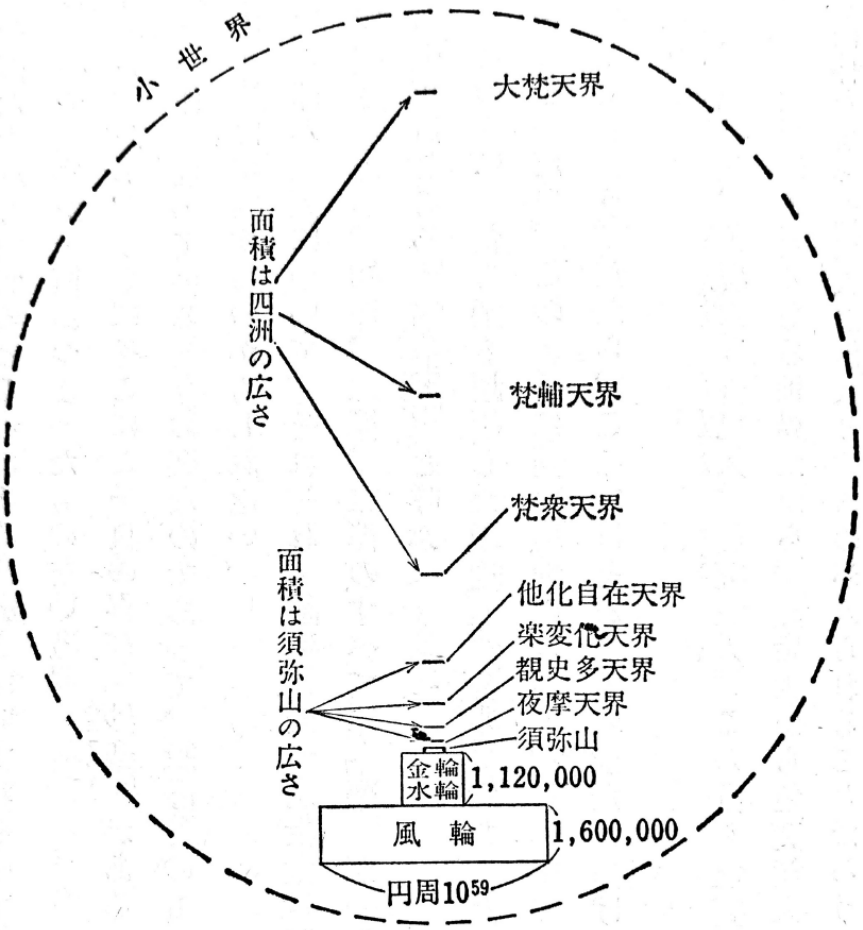
➡ 私たちが住む環境世界は、すべての衆生の〈心〉（アーラヤ識、第八識）が共同で作り出したもの。個々人の環境世界はそれぞれ異なる（人人唯識）が、大部分は共通している。



第1図　須弥山世界の俯瞰図

[1] 【玄奘訳】所言成劫、謂従風起乃至地獄始有情生。謂此世間災所壞已、二十中劫唯有虚空。過此長時、次応復有等住二十成劫便至。一切有情業増上力、空中漸有微細風生。是器世間将成前相。……（T1558, 29, 63a9–13）

【現代語訳】成劫と言われるのは、風が起きてから地獄に初めて有情が生まれるまでである。すなわち、このように世間が災いによって壊れてしまってから、二十中劫はただ虚空があるだけである。この長い期間を過ぎて、次にまた同じ二十〔中劫〕かけて成劫に至る。一切有情の業のすぐれた力（増上力）によって、虚空に微細な風が段階的に生じる。これは器世間がこれから生じる前触れ（前相）である。……



第10図　一小千世界の構成図

定方晟『須弥山と極楽: 仏教の宇宙観』(講談社学術文庫)

有義、若爾、諸仏菩薩応実変為此雑穢土。
諸異生等、応実変為他方此界諸浄妙土。
又諸聖者、厭離有色、生無色界、必不下生、変為此土、復何所用。

ある者の説〔では、この回答を批判して、次のように言う。〕もしそうであるならば、ブッダや菩薩たち〔の汚れた種子がなくなった第八識〕がこの汚れた国土に変化してしまうことになる。〔逆に〕異なったところに生まれるもの（異生）など〔の第八識〕が、〔現在生きている世界とは別の〕他方〔の世界〕と、〔現在生きている〕この世界と、様々な浄土に変化してしまうことになる。また、聖者たちや、色（もの）〔でできた身体や世界〕を厭い遠ざけた〔有情〕が、無色界に生まれ、決して〔色界・欲界という〕下界に生まれることがない場合、〔それら有情の第八識が〕変化してこの〔色（もの）でできた〕国土になってしまうことには、どのような意味（所用）があるのか。

➡ 環境世界は、すべての衆生が共同で作り出しているのであれば、汚れがなくなったブッ

ダの〈心〉が、この汚れた世界を作り出しているということになるが、それはおかしいのではないか？　また、物質的な身体を持たない無色界の衆生の〈心〉が、物質でできた環境世界を作り出すというのも、おかしいのではないか？

是故、現居及当生者、彼異熟識変為此界。経依少分説「一切」言。諸業同者、皆共変故。

以上のことから、現在〔この世界に〕生きている者と将来〔この世界に〕生まれてくる者がいて、その異熟識が変化してこの世界になる。〔先に引用した〕経は、〔全体ではなく〕一部分（少分）について「すべての（一切）」という言葉で説いたのである。〔一部の有情たちの〕多くの業が一致すれば、全員で協同で〔第八識が〕変化して〔その有情たちの世界になるのである〕から。

➡ 環境世界を作り出すのは、現在、その世界に生きている衆生と、来世にその世界に生まれてくる衆生の〈心〉である。

有義、若爾、器将壊時、既無現居及当生者、誰異熟識変為此界。……

ある者の説〔では、この回答を批判して、次のように言う。〕もしそうであるならば、環境（器）が崩壊しようという時、現在〔その世界に〕生きている者と将来〔その世界に〕生まれてくる者がいないのに、誰の異熟識が変化してこの世界になるというのか。

➡ 環境世界は生成と崩壊を繰り返す。環境世界が崩壊する時や生成し始める時には、衆生がまったくいなくなる。衆生がまったくいない環境世界を作り出すのは、どの衆生の〈心〉なのか。

然所変土、本為色身依持受用。故若於身可有持用、便変為彼。由是、設生他方自地、彼識亦得変為此土。故器世界将壊初成、雖無有情、而亦現有。

しかるに、〔異熟識が〕変化した国土は、もともと色（もの）でできた身体のために維持され、活用（受用）される。したがって、もし身体にとって維持し活用できるのであれば、〔異熟識が〕変化してその〔身体のための国土〕となる。以上のことから、たとえ〔ある有情が、ここことは異なる〕他方にある自分の領域（自地）に生まれたとしても、その〔異熟〕識が変化してこの国土となることができる。ゆえに器世間が崩壊し最初から生成する際、有情がいないとしても、〔その器世間は〕実際に存在するのである。

➡ 環境世界は身体を受け入れるために存在するので、たとえその環境世界に衆生がまったく存在しなくても、他の環境世界に衆生が存在するのであれば、〈心〉はその環境世界を作り出す。

『成唯識論同学鈔』における議論

問。付有漏第八識変器界義、且変欲界器界之時、一切欲界同可変之耶。

問う。有漏の第八識が環境世界（器界）に変化することについて、〔第八識が〕欲界の環境世界に変化する時、すべての欲界が同じく変化するのか。

答。悉可変之也。

答える。ことごとく変化するのである。

付之。世界既有十方、不知辺際。有頂之上、亦有欲界。風輪之下、越テ有欲界。恒沙塵数、非算数所及。寧一切器界悉変之耶。若強変之者、業感第八、遙縁他方極遠境界耶。況十方無辺世界、皆変之者、與大円境智所縁、有何差別耶。

これについて、世界には十方があり、辺際を知らない。有頂天の上には、さらに欲界がある。風輪の下にも、さらに欲界がある。〔欲界の数は〕ガンジス川の砂の数ほどで、数えることができない。どうして一切の環境世界がことごとく〔第八識によって〕変化するというのか。もし強いて変化するというのであれば、業の結果としての第八識は、はるか他方にある極めて遠い認識対象を認識するというのか。いわんや十方無辺世界が、皆〔第八識の〕変化だというのであれば、〔ブッダの智慧である〕大円鏡智の認識対象とどのような違いがあるというのか。

➡ 三千大千世界とよばれるように、環境世界は無数に存在する。そのすべてを〈心〉が作り出していると考えるのは不合理ではないか。また、すべての環境世界を作り出しているとすれば、はるか遠くの世界まで〈心〉が認識していることになる。そのような能力が、凡夫の〈心〉にあるというのか。

答。業力所変器界、分斉難知。是以唐朝人師歎而有言「此義難解、隨弥勒可決断」文　本朝先徳、為遣唐未決。末学受膚、豈決雌雄耶。

答える。業の力によって変化した環境世界（器界）の範囲については、知ることが難しい。だから唐朝の人師は「この教義は難解である。弥勒に聞かなければ決着することができない」と歎いたという。本朝の先徳は、〔質問を〕唐に派遣したが決着していない。〔私のような〕末学に、どうして雌雄を決することができようか。

爰天長之比、本朝有一明匠、其名曰隆長。声高四海、学光二明。即決此義云「本疏述定果色、遠キヲハ不変之、近処ヲハ可変」文　准之可言「若遠欲界、雖同界、不変之。如灯光雖照近、不及極遠処。識変作用亦同之。不同大円鏡智照一切界」文

天長年間〔824-834〕、本朝に一人の明匠がおり、その名を隆長といった。名声は四海に聞こえ、学は〔内明・因明の〕二明に輝いていた。この問題を決着しようと「本疏〔『成唯識論述記』〕で、瞑想で作られる物質（定果色）について、遠いものには変化せず、近いところには変化する」と述べた。これに準じて「もし欲界が遠ければ、同じ環境世界であってもそれには変化しない。灯火の光が近くを照らしても極めて遠いところには及ばないようなものである。識が変化する

作用もこれと同じであり、大円鏡智が一切の世界を照らすのとは同じではない」と言うべきである。

➡ この問題については古来、日中のあいだで議論してきたが、解決が困難であった。平安時代の学僧・隆長は、ブッダが見せる仏国土のビジョンのように瞑想によって作られる物質（定果色）が近い範囲にしか及ばないことを根拠に、〈心〉もまた近くの環境世界しか作らないのではないか、という解決案を出した。

雖有此義、頗難指南。正見論文、「然所変土、本為色身依持受用。故若於身可有持用、便変為彼。由是説生他方自地、彼識亦得変為此土」云云

このような提案があったものの、指南とするのはすこぶる難しい。正しく『成唯識論』の文を見れば「しかるに、〔異熟識が〕変化した国土は、もともと色（もの）でできた身体のために維持され、活用（受用）される。したがって、もし身体にとって維持し活用できるのであれば、〔異熟識が〕変化してその〔身体のための国土〕となる。以上のことから、たとえ〔ある有情が、ここことは異なる〕他方にある自分の領域（自地）に生まれたとしても、その〔異熟〕識が変化してこの国土となることができる」とあるからである。

➡ 『成唯識論』に「〈心〉は他の環境世界も作り出す」とあるので、隆長の案は妥当ではない。

本疏釈之、「欲界欲界同、乃至上亦爾。」文　又云「今此義言、現雖無用、身若往彼、可得持身、故須変作。……」文

本疏〔『成唯識論述記』〕はこの〔『成唯識論』の一節を〕解釈して、「欲界と欲界は同じであり、上〔の欲界〕もまた同様である」と述べた。また「ここで言われていることは、現在において活用されることがなくても、身体がもしそこに行けば、その身体を保持することができるので、〔衆生がまったくいない環境世界でも〕変化して作り出さねばならない。……」文

➡ 現時点で衆生がまったくいない環境世界であっても、将来的に衆生によって用いられるのであれば、〈心〉はその世界を作り出す。

任論疏文、諸欲界器、皆有可依持受用之義。故十方無辺欲界器界、悉変之也。既雖他方無辺世界、尚同地器、非異界極遠境。故非縁異地極遠境也。

『成唯識論』や注釈書の文によれば、すべての欲界の環境世界は、すべて維持され、活用されるという意味がある。したがって十方無辺の欲界の環境世界は、ことごとく〔アーラヤ識が〕変化するのである。他方の無辺にある世界であっても、なお同じ領域の環境世界であれば、異なった世界の極めて遠い認識対象ということにはならない。したがって異なった領域の極めて遠い認識対象ということにはならない。

➡ 環境世界が、個人の経験などに応じて部分的に存在するということはない。環境世界である以上、その全体が〈心〉によって作り出される。したがって、無数にあるすべての世界が〈心〉によって作り出される。
➡ 鎌倉時代の結論：〈心〉は宇宙と同じ大きさである。

おわりに

かつて列島で行われていた哲学的な営みは、現在、その多くが忘れられている。哲学の有無が文化の勝劣などにつながるわけではないが、上に述べたような哲学的営為が忘れられたまま、「日本文化」などについて語られていることには違和感がある。